

49 ミュッツェル 『腰衣から流行服まで』 服装史の場合

Mützel, Hans. Vom Lendenschurz zur Modetracht aus der Geschichte des Kostüms. Berlin, Widder, 1925. 331p. 8 col. plates 23.2×15.8 cm <383.1-M>
Hiler p. 636 Colas 2175

著者ミュッツェルによると、服装の史学的概念は19世紀初頭のロマン派時代に生まれ、それまでの混沌としたものへの秩序づけが始まった。当時の研究者はすでに芸術的関心を持っていたので、服装史についても単に形態の純然たる装飾としての面だけを認めて、その後の発展にとって決定的な根拠となる人類学的、社会学的、民族心理学的な部面についてはほとんど触れなかった。だが形態的で装飾的な要素は可視的表現に過ぎない。服飾モードの発展においても、モードの悲劇やその運命・盛衰は表面化していたので、モードの興隆や衰退、危機や威力などの原因についても調べ、それらが人間の精神的かつ内的な諸特性のなかにあることが分かってきた。

服装学はこれまでヨーロッパ的観点からのみ研究されてきたため、民族衣装の歴史は主にローマ、ゲルマンの諸要素の混合からなる西ヨーロッパの民族衣装の発達史であった。古代ギリシャやローマ以前は文化の中心が東地中海沿岸の諸国にあり、エジプト、バビロニア、アッシリア、シリアは太古の時代に統一的なヨーロッパとは全く異なった形態の衣服を形づくっていて、衣服は独自に発展する可能性を持っていたのだが、後の古典時代ではこの可能性は全く認められなくなってしまい、服装研究はあらゆるヨーロッパ的先入観に基づいていたため、非ヨーロッパ世界については正しく評価されにくかった。こうしてオリエントは常に西洋の付属物とされて、人間の衣服の全形体領域における比較研究に欠け、比較服装学はこれまで全く行われていなかった。しかし、世界的な視野のもとに諸民族の服装を観察すれば、西洋近代の服装も、人類が利用してきた衣服のわずかな一部に過ぎず、数多くのヨーロッパ的先入観も色あせて見えるであろう。

目次の第1章は、衣服の諸問題——ポンチョ、巻衣、チュニック、カフタン、結び。第2章は中世までのヨーロッパ服の発展、第3章はボタンとその歴史的役目について、第4章は男女のズボンについて、第5章は西欧服における東方的要素、第6章は真偽のダンディについて、などとなっている。(佐藤)